



# アムステルダムの飾り窓と オランダ人の決意

会員 宮城 知佳 (71 期)

アムステルダムと聞いて何を思い浮かべるだろうか。風車、レンブラント、アンネ・フランクの家、美しい運河の町。どれもこの町の魅力だが、私がこの町で最も印象的だったのは、「飾り窓」だった。

昨年冬、アムステルダムに滞在することになった私は、中央駅近くの宿にチェックインし、夕飯でも食べに行こうと裏口ドアを開けた。赤い女性と目が合った。宿と路地を挟んで向かいの部屋にいるのだが、窓全体が真っ赤なライトで照らされていたのだ。露出の多い下着姿で、全身が見える細長い窓からこちらを向いて立っていた。彼女は固まった私を一瞥したが、隠れるでもなく手元のコンパクトミラーで化粧直しを続けている。私は会釈(!)をし、慌てて裏口へ引き返した。

混乱しながら部屋に戻った私は、Google Mapで先ほどの建物を調べた。すると、その一帯が、「飾り窓 (De Wallen)」と呼ばれる売春宿の並ぶ地帯だということがわかった。

飾り窓については、ガイドブックの小さなコラムで読んでいたが、合法的な売春宿だという程度の内容だった。私がイメージしていたのは、ひっそりとした民家の窓が夜になると開き、薄明りの灯った窓辺に女性が座って客を待っているような、うら寂しく後ろめたい雰囲気のものだった。しかし、今しがた見た飾り窓は、私のこのような「売春宿」のイメージと全く違った。

翌日から、私は飾り窓をそれとなく観察した。冬のアムステルダムは16時には暗くなり川沿いにいくつもの赤い光が並ぶ。伝統ある古教会の窓からも向かいの赤い窓が見えた。女性は全身が見えるよう窓のそばに立ち、頭から足先まで通行人に見せつけている。部屋の奥にはベッドが見える。縦長の窓がずらりと並び、カーテンが閉まり部屋の中が見えない窓もある。

すごい町に来てしまったぞと衝撃を受けていると、Google Mapで「売春博物館 (Red Light Secret)」

なる場所を発見した。このときばかりはGoogleの察しの良さに感謝した。

博物館では、オランダの売春政策について解説されていた。売春を一つの職業として認めただけで、売春業特有のあらゆる危険から売春婦の権利を保障するため、多くのルールが定められている。実際に働いている売春婦(夫)のリアルな声や実情の紹介もあり、「私は私の仕事に誇りを持っています」という女性のインタビュー音声印象的だった。

合法に踏み切った当時、ヨーロッパで合法とする国は殆ど無かったから、オランダでは多くの議論を踏まえた国民の相当な覚悟があったはずだ。日本では、売春は違法とされる一方、禁止される「売春」の範囲が狭く、実質それに近い性的サービスが提供されていると聞く。しかし、性産業を社会に必要なものとするなら、一部の人だけが落ちてしまう暗い穴として放置するのではなく、自ら選択した人が誇りを持って安全に働けるようにすることが必要ではないか。合法とするにせよしないにせよ、前提の議論が殆ど無い。売春博物館についても、日本で出版されているガイドブックで全く紹介されないのはなぜなのか。

写真は、売春博物館の中の、飾り窓から客を呼ぶ気分が味わえるコーナーだ。ひとりでは気恥ずかしさが勝って座れなかったが、仲間と行く際にはぜひ座ってみてほしい。

